

青梅は面白い
美しい響きの町の名を探る

高校時代に登山を始め、青梅線や五日市線に何度となくお世話になった。各駅に停車するたびに駅名に眼が引きつけられた。河辺（かべ）・日向和田（ひなたわだ）・軍畑（いくさばた）・二俣尾（ふたまたお）・古里（こり）・・・。

登山ガイドブック・国土地理院の地図・地域で出している様々な資料などを見ている内に、駅名ばかりではなく沿線各地のいくつかの「意味ありげな地名」が気になってきた。

後年、青梅の町を散策する機会も何度もあり、青梅市内を詳細に示す地図を眺める内に、何かを感じさせる響きの地名が並ぶ町「青梅」が頭から離れなくなってきた。

町村合併が進み、青梅市の面積もかなり広くなり、さらに地域の地名表示変更なども進んできたので昔とは大分状況が変わってきていると思うが、青梅再訪問を機に、現存する青梅市の「45 町」を眺め直し、気になる町を探ってみた。

< 1 > 多摩川の流れて連なる「水の町」

河辺町（かべまち）はその名の通り川の畔にあり、昔は河辺村と言った。多摩川北岸の海拔 170m～180m の高さに広がる河岸段丘。多摩川の水面は海拔 140m 程度なので、30～40m の段差がある。

一方、そのわずか上流の南岸に流れて沿って東西に広がるのが**長淵**（ながぶち）。S 字型に大きく湾曲しながら流れる多摩川の長い淵が地名の由来と想像できる。

長淵の広がり川を挟んで対峙するように北岸に広がるのが**千ヶ瀬町**（ちがせちょう）。南岸は「淵」で北岸は「瀬」と、湾曲しながら流れ下る多摩川をイメージできる美しい地名である。サラリーマン時代に、この町から通っている男と仕事をしたことがある。住所を聞いてその響きが気に入り、苗字が同じだったこともあり、親しみを感じてしばしば酒を酌み交わした。

千ヶ瀬町のわずか上流に、多摩川が最大の屈曲をする所がある。ここにあるのが**滝ノ上町**（たきのうえちょう）。地図上で見る多摩川の最大屈曲地点の北岸から、段丘の落差（30～40m）を落ちる白滝が地名の由来になっている。渇水時には落水は見られないようだが、この滝の別名が「富士向ノ滝」、味わいは一層の感がある。滝の流れの源は西隣の**天ヶ瀬町**（あまがせちょう）の金剛寺の湧水（天ヶ瀬堀）で、この寺の梅の木は平将門伝説にあるもので、「青梅」という地名の由来になっている。付近は今では住宅地になっているが、昔は青梅では数少ない水田地で「天ヶ瀬田圃」と呼ばれていた。



「天ヶ瀬」という地名も何か意味ありげで、しかも心地よい響きを持っている。天照大神に関する伝承だろうか、それとも「雨が瀬」「甘が瀬」「尼が瀬」・・・、想像が膨らむ美しい町の名前だ。

川・水に関係した地名を拾って見たら、町中にもかかわ

わらず、入江を意味する「江」を含む地名 **住江町**（すみえちょう）が気になった。多少期待はしてみたが、どちらかというくと近くにある住吉神社が関係しているような気がする。

< 2 > 多摩川から離れても「水」

多摩川の流れから離れた所にも、「水」と関係のありそうな町名はあるが、さほど多くはない。青梅線の電車が青梅駅を出て宮ノ平に向かうと、右側の車窓に海拔 300m 程度の低い稜線が走るようになる。この尾根は分水嶺になっていて、北側の谷を流れる黒沢川は北行して入間川に流れていく。黒沢川に沿った広いエリアが**黒沢**(くろさわ)という町で、多摩川の流れからはいささか離れはするが、「川」に関係する地名であることには変りはない。沢沿いに炭層があることがわかり、1935 年(昭和 9 年)から採掘が始まった。東京都にある唯一の炭鉱として、亜炭・泥炭の産地だったらしいが、1960 年(昭和 35 年)に廃鉱となった。炭層があることが「黒い沢」という地名の起源に繋がっていると思われる。

黒沢川の東側を流れる霞川も入間川の支流になっている。源流の山間に**勝沼**(かつぬま)という町が広がっている。海拔 200m 程の低い尾根にはさまれた谷間には溜池のようなものが点在しており、沼地であったのかもしれない。明治 22 年に青梅町と合併するまでは勝沼村と言われていた。三田氏がこの地に勝沼城を構えていたが築城の時期は定かでないらしい。城のその後の動きについては、師岡町の項で再び触れることにする。また、応永年間(1400 年頃)の古文書に勝沼という地名が現われるとのことなので、地名についても歴史を紐解くと何か面白い話が出てきそうな気がする。

< 3 > 多摩川を遡る

青梅駅から奥多摩方面に向かって歩くと、右手に 200~300m の丘陵に沿って町並みが続く。**仲町**(なかまち)・**上町**(かみちょう)・**森下町**と並びその西にあるのが**裏宿町**(うらじゅくまち)。昨今青梅の町は「昭和レトロの町」として騒がれているが、古くから甲州裏街道の宿場町として栄えたところで、昭和レトロなど問題にならないような歴史のある町である。宿場町の表側と裏側と読み取れば、山肌に近い街道から見て後側にあるのが裏宿と言うことなのかもしれない。

この地にある裏宿神社は、中世の頃には摩利支天宮と呼ばれていたようで、現在の裏宿神社と名付くまでにはいくつかの出来事があったらしい。

青梅線の電車も青梅街道も、多摩川の流れに牽かれるように屈曲を繰り返す。青梅を出て奥多摩に向かう電車は、川の流れに合わせて南に大きく垂れ下がるようにカーブする。その屈曲部の最南端にあるのが**日向和田**(ひなたわだ)。このあたり、昔は和田村で、多摩川北岸の日当たりの良い場所の字名は日向和田、南岸の日の出山の北端が迫る日当たりの良くないところには日影和田と付いていた。現在は、日向和田は町の名として残っているが、日影和田は青梅市和田町の一部になってしまっている。

二俣尾(ふたまたお)は、甲州裏街道から分れて秩父へ行く道の分岐点(二又)だったのが地名の由来らしい。小さな山を越えて雷電山の裏の谷に入り、松ノ木峠・小沢峠を越えて名栗川に出て、さらに海拔 600m の山伏峠を越えて横瀬を経て秩父へ。商取引ひとつのために艱難辛苦を乗り越えて出かけた時代のことを思うといささか驚かされる。



沢井(さわい)は多摩川の畔にある地名としてはわかりやすい。いかにも美味しい水が飲めそうな気がしてうれしくなる地名だ。昨今、この地の小澤酒蔵の「澤乃井」の方が有名になってしまった。高水三山などの山に行くときに世話になった町でもある。青梅線の車窓から見ると、沢井駅を過ぎると多摩川の両岸が迫るようになってくる。

< 4 > 御岳山を巡る三つの町

青梅市には御岳山と関係する町名が三つある。

青梅線御嶽駅を降りると、目の前（南）には僅かな平地の集落があるだけですぐに多摩川の深い溝が落ちている。多摩川の北岸にへばり着くように並ぶ集落が**御岳本町**（みたけほんちょう）。北側からは山が迫ってきており、人々に許されている平地はごく僅かしかない。

南に進み多摩川を右岸に渡るともうひとつの集落が広がっている。この集落から御岳山の登山口までが**御岳**（みたけ）という町になっている。多摩川に近いところに人里が集中しているが、支流の大沢川の谷間に入ると人家はまばらになって来る。

登山口の滝本から山道を登って海拔**929m**の御岳山の山頂に上がると、思いも寄らぬ集落が待っている。町の名前は、青梅市**御岳山**（みたけさん）と言う。高野山ほどの広がりではないが、宿坊・旅館・山荘など**40世帯・130人**がここで暮らしている。

< 5 > 木に関係する気になる地名

青梅駅の南西、多摩川に近いところに**大柳町**（おおやなちょう）がある。この地名の起源が「大きな柳」であれば木に関係する地名と言えるが、「大きな築」だとすれば多摩川と切り離すことの出来ない地名だということになる。

成木（なりき）は石灰の産地で、城造りや寺社造りの材の一つである漆喰が珍重された時代には賑わった。江戸時代に「成木石灰」と言われていたので、地名の歴史としてはそれ以前のものと思われる。成熟した木が多く茂っていたことから出来た地名であると言う説と、熊谷次郎直実の家臣の成木太夫の住まいがあったことによる説とがあるようだが、さらに古い情報も見つかった。和銅年間に行基が遊歴中に山中の楠が放光鳴動したのを見つけ、この木を切り出して軍荼利明王（ぐんだりみょうおう）を彫り刻んで安置したことから「鳴る木」が転じて「成木」となったと言う説。

根ヶ布（ねかぶ）は、黒沢川の右岸の海拔**200m**ほどの小山の山間にある集落で、霞川の源流になる。地名の響きからは、「何か絶対あるぞ」と感じるのだが、調べてみても解らなかった。起源を「根株」と想定すると、巨木・古木の多い里には考えられる地名だと思う。高峯山曹洞宗天寧寺という立派なお寺があり、大きな檜木の木立があるとのことなので、この説も悪くないと想像を膨らませてみた。天寧寺は、文亀年間（**1500年頃**）勝沼城主の三田政定が天下安寧を祈念して創建したとのこと。

梅郷（ばいごう）という町は、青梅市の象徴的存在のひとつ「吉野梅郷」から来ている地名だとすぐわかる。天ヶ瀬町の金剛寺の境内にある「平将門ゆかりの梅」を根分けして増やしたという話を聞いたことがある。**1889年**（明治**22年**）に近隣**4か村**の合併によってできた新しい村に、大和の吉野になぞらえて「吉野村」と名付けた。青梅市に編入されたのは昭和**30年**（**1955年**）。

梅郷の北側にあるのが**柚木町**（ゆぎまち）。梅の隣が柚子とは何とも美味しい町並びではないか。

柚木という地名は、読み方は様々だが、全国各地にある地名で、「柚子に関係した何らかの伝承」が由来となっている所と、後に文字をあてた所とがあるようだが、ここはどんな由来なのだろうか。

青梅駅を出た電車が、右手に山裾とそこを緩やかに登っていく小曾木（おそき）街道を見やりながら宮ノ平に向かって走り始める。線路と青梅街道に挟まれたあたりが**森下町**（もりしたちょう）。背にした山の木々の群がりを思えば「森の下」と感じ取ることにはできる。

東青梅駅から入間川水系の霞川に沿って北東へ進んだ所にある**木野下**（きのした）も、森下町と同じように、読んで字の如き地名で北側に笹仁田峠の山脈を背負っている点で森下町とよく似ていると想像して見たが、色々調べてみたらそのような単純な話ではなかった。木ノ下村の八幡社（現在の木下神社）に椎の巨木があり、これをご神木としていたと風土記に書かれていることから、これが地名の由来と考えられるとのことだった。

ここまでの「木に関係する地名」は勝手に想像できそうな地名だが、**小曾木**（おそき）は想像することも難しい奥深そうな地名だ。黒沢川の支流に位置し、さほど高くもない山に囲まれた所。

黒沢村・富岡村・南小曾木村が合併して、明治時代に小曾木村が誕生。それ以上のことは残念ながらわからなかった。

青梅駅の南西、多摩川の対岸にある**駒木町**（こまきちょう）からは、縄文時代の遺跡が発掘された。

日本各地で見られる「駒」が付く地名は、馬に関係していることが多い。また、河川が屈曲している所にも多い地名で、「こま(曲)」「き(処)」という地名の由来説があるらしいが、この地の「駒木」は果たして何だろうか、楽しみに取っておくことにする。

霞川に沿って入間市の平野部に向かって行くと、右岸に**藤橋**(ふじはし)という町がある。

山の中ではないので、藤の蔓で編んだかざら橋のようなものがあつたとは思えないし・・・と思って地元の歴史情報を探っていたら、小田原北条の配下の藤橋小三郎が城主である藤橋城がこの地にあつたことがわかつた。

< 6 > 入間川水系に沿って

青梅市のプロフィールを語るとどうしても多摩川流域に眼が行きがちであるが、東側に大きく広がる入間川水系にも地理的に歴史的に面白いものがある。航空写真や国土地理院の地形図を見ると、多摩川と霞川に挟まれたきれいな扇型の平地が広がっているのがわかる。そして青梅を中心にいくつもの街道が放射状にひろがっているのが確認できる。



吹上(ふきあげ)は、東青梅駅の北東に位置し扇状地の北辺になる。北側に天寧寺や塩船観音に繋がる海拔 200 m の山を背負う場所で 185m の高さになる。一般的に、風が土砂を吹き上げる土地にこの地名が付くことが多いようだが、ここはどうだろう。

吹上の北側の山の斜面から山頂に貼り付くように建つのが塩船観音で、この地を**塩船**(しおぶね)と言う。つつじで有名な塩船観音は大化年間に開山したという 1300 年余の歴史を持つお寺で、正式な名前は真言宗醍醐派別格本山大悲山塩船観音寺。天平年間に僧行基がこの地を訪れた折り、荒廃した堂宇を再興して、周囲が丘に囲まれて船の形に似ていることから「仏が衆生を済度する弘誓(ぐぜい)の舟」に擬して塩船観音と名付けたと言われている。山塩を船に積んで運んでいたのではないかと勝手に想像して、付近に塩の産地や「塩」が付く地名を探してみたが見当たらず、意外な結末となった。

今寺(いまでら)と聞けば寺と関係がある地名だろうと想像がつく。今寺にある寺と言えば報恩寺。報恩寺の正式名称は、天台宗藤橋山正覚院報恩寺。元慶元年比叡山の僧により開基、その後いくつかの曲折を経て天正年間(1500 年代後期)にこの地の藤橋城主の平山越前守平重吉により再々興されたことから、山号が藤橋山となった。

大門(だいもん)という地名は、塩船観音寺または今寺の報恩寺の大門があつたことによると言われている。それにしても、天台宗・曹洞宗いずれの寺かわからないと言う話も面白い。

今井(いまい)は井戸とでも関係する地名ではないかと勝手に想像してみたが、実は人の名前だった。室町時代にこの地に城(今井城)を構えていた今井四郎という豪族の名前が地名の起源だという説が有力らしい。

木野下・今寺・塩船・大門などに挟まれた**谷野**(やの)は小さな町。霞川の支流が何本か合流するような所にある。今では扇状地の海拔 168m の平坦地ではあるが、昔は谷を形成していた所なのかもしれない。しかし、これを「やの」と読ませた経緯は・・・?

野上町(のがみちょう)は、古くは野上村と言った。河辺駅の北東に位置し、扇状地のほぼ中央にある。霞川の下流から見れば「野」の「上」なのだろうか。

勝沼城を持っていた三田氏は山内上杉の配下にいたことから小田原北条に攻められて滅亡。後にこの城を手に入れたのが師岡山城守将景。城の名も師岡城と変わり、**師岡町**（もろおかちょう）という地名誕生の由来となった。同じ城を由来とする町が二つ存在するというのも珍しく、面白い。



青梅市東部の航空写真（扇形の広がりがよくわかる）

< 7 > しめくくり

青梅市の気になる町名を拾い出して調べてみたら、こんな長さになってしまった。

どこの町にも、どこの村にも名前が付いていて、その名前には必ず由来がある。それを調べてみると、その町に一層親しみが増してくるから不思議だ。

近年、町村合併や市町村名の改名が進んで、古くからある意味ある地名が消えてしまい、東西南北を冠したり、ひらがなの地名にしたり、言葉いじりだけの地名にしたりが増えているのは残念なことである。たとえ難読・難書な地名であっても、その歴史や意味を大事にして守って行くことが肝要であると感じている。

以上

町の名前	読み	水に関係	多摩川水系	入間川水系	木に関係	備考
天ヶ瀬町	あまがせちょう	○	○			
今井	いまい	○		○		
今寺	いまでら			○		
裏宿町	うらじゅくちょう		○			
大柳町	おおやなちょう	△	○		△	
小曾木	おそき			○	○	
勝沼	かつぬま	○		○		
河辺町	かべまち	○	○			
上町	かみちょう		○			
木野下	きのした			○	○	
黒沢	くろさわ	○		○		
駒木町	こまきちょう		○		○	
沢井	さわい	○	○			
塩船	しおぶね			○		
新町	しんまち			○		
末広町	すえひろちょう			○		
住江町	すみえちょう	○	○			
大門	だいもん			○		
滝ノ上町	たきのうえちょう	○	○			
千ヶ瀬町	ちがせちょう	○	○			
富岡	とみおか			○		
友田町	ともだまち		○			
仲町	なかまち		○			
長淵	ながぶち	○	○			
成木	なりき			○	○	
西分町	にしわけちょう		○			
根ヶ布	ねかぶ			○	△	
野上町	のがみちょう			○		
梅郷	ばいごう		○		○	
畑中	はたなか		○			
東青梅	ひがしおうめ			○		
日向和田	ひなたわだ		○			
吹上	ふきあげ			○		
藤橋	ふじはし			○		
二俣尾	ふたまたお		○			
御岳	みたけ		○			
御岳山	みたけさん		○			
御岳本町	みたけほんちょう		○			
森下町	もりしたちょう		○		○	
師岡町	もろおかちょう			○		
谷野	やの	○		○		
柚木町	ゆぎまち		○		○	
和田町	わだまち		○			